

悠久の河

16

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

別れ

「さあ、早くしろ、負ってやる。恥ずかしくな
ど無い。ゆうは、病気なんだ。兄貴に負われる
のは、これが最後かもしれないぞ。今からは、
何か有ったら五郎太がゆうを負うだろう」

ゆうは少し戸惑ったが、勘六の背にそっと体
を預け恥ずかしそうに肩のあたりに顔を付け
た。

「お兄さまの背中、温かいわ。昔と同じ。ゆう
が村の子ともたちにいじめられて泣いている
と、お兄さまが、いつも負ってくれたわ。思い
出しちゃった」

勘六は何も言わず、黙って歩いた。

そよ風に稲の葉が戦いだ。

その夜、勘六は現場から帰宅した父、彌兵衛
と激しく口論した。初めてのことだった。

ゆうは熱にうなされながら、ぼんやりと勘六
の声を聞いた。ゆうが勘六の声を聞いたのは、
それが最後となった。

勘六が父の彌兵衛と口論した揚句、家を出て
から一週間が過ぎた。その間も、彌兵衛は何事
も無かったように川普請の現場に通い続けた。

サトもクニも、心の中では勘六のことを案じ
ながら、口に出すことは出来なかった。



画 高田勲

ゆうの熱は相変わらず続き、ゆうが勘六の家出
を知ったのは、十日も経ってからのことだった。

—お兄さまは、あの時、もう家を出ることを決
意していたのかもしれない。どこへいらしたの
かしら。でも、あの思慮深いお兄さまのことだ
もの、無謀なことにはなさないわ。お兄さまに
も、きっとお父さまのお心の内が解る日が来る
わ。—

ゆうは、不安な気持ちを撥ね除けるように、
自分に言い聞かせた。周藤家の誰もが、勘六の
家出を外の人々に知られてはならないと、申し
合わせたように口を噤んだ。

そんな折、松江藩の家老、三谷権太夫が出雲
地方を視察して歩くことになった。

宝永五年（一七〇八年）のことである。

視察は、農民たちの生活の様子や稲の出来具
合、災害後の復旧工事等を見て回ることに目的
だった。

権太夫は日吉村にも立ち寄り、せひ彌兵衛の
工事現場を見たいと所望した。

「この時期に、自分の身代を投げ打ってまで一
つの村と民を救おうとする彌兵衛なる者、大気
者よのお。天晴な行いぞ。早く工事現場を見た
いものだ」

権太夫は日吉村の川普請の現場に着くまで
に、何度も御付の者に呟いた。一方、日吉村の
現場では、御家老さまの視察とあって、彌兵衛
をはじめ、人夫たちも無礼が有ってはならぬと、
手を休め、頭を下げて、松江藩家老の三谷権太
夫を迎えた。

「普段通りの姿が見たいぞ。わしが居ることを
意識せず、どんだん仕事を致せよ」